

令和元年度 下野市中学生平和研修派遣事業 報告書



広島県 広島市

令和元年8月5日(月)～8月7日(水)



下野市

市長あいさつ



下野市長 広瀬寿雄

下野市は、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現を願い、平成18年6月16日に「非核平和都市宣言」を行いました。

中学生平和研修派遣事業は、非核平和都市宣言の推進及び平和学習活動の一環として取り組んでおり、今年で6回目となります。

終戦から74年目を迎え、被爆者の平均年齢は82歳を超えました。何よりも原爆の被害の悲惨さを伝えられるのは、被爆者の方々の悲痛な体験談です。

私たちがその話を聞くことができなくなってしまうという現実が、目の前に迫っています。

これから先、語り継がれた戦争の記憶と教訓を、戦争を知らない若い世代にどう伝え、つないでいくか、それが私たちに託された大きな使命であると考えております。次代を担う中学生を広島に派遣し、以前、そこでどんなことが起こったのか、自分の目で見てくることの意義は、決して小さなものではありません。

派遣団の生徒たちは、各学校の、そして下野市の代表として平和記念式典へ参列し、各学校の生徒の皆さんが折った千羽鶴を「原爆の子の像」に奉納してきてくれました。

今年、リニューアルオープンされた広島平和記念資料館は、8月6日のヒロシマの惨状を被爆者の視点で再現し、被爆者の遺品、被爆の惨状を示す写真や資料を数多く展示することで、その一つ一つから戦争の残酷さを後世に伝えることに力を尽くしたとのことであり、派遣団の生徒の皆さんは多くのことを知り、学ぶことができたことと思います。

このほかにも、原爆ドームの見学、被爆体験講話の聴講、灯ろう流し体験などを通じて、原爆の恐ろしさや戦争の悲惨さを学ぶと同時に、今の当たり前が、たくさんの方々の苦勞のもとにあるということ、心に深く刻むことができたものと思っています。

そして、きっとその思いを学校の仲間や身近な方々へ伝えてくれるものと信じております。この取組が、戦争の悲惨さについて再考し、平和の尊さについて考えるきっかけとなっただけであれば幸いです。

最後になりましたが、本事業にご参加いただきました生徒の皆さんとその保護者の皆様、また、事業実施にご協力いただきました多くの方々に心から感謝申し上げます。

派遣団団長報告

「中学生平和研修派遣事業に参加して」

下野市中学生平和研修派遣団団長 坂口 修

令和元年8月5日（月）から3日間、下野市・壬生町中学生平和研修派遣団団長として、中学生と共に広島での研修に参加してきました。

派遣団員は、下野市4校の8名と壬生町2校の4名の中学2年生12名、教諭2名、事務局の各市町職員2名の合計17名でした。

結団式の挨拶の中で、「平和の尊さ、戦争の悲惨さについて自分の目で見て、肌で感じ取ってきて欲しい」と話しましたが、私自身も広島が初めてであり、この平和研修派遣事業を心待ちにしていました。

出発当日、下野市役所ロビーにて出発式を行い、早朝にもかかわらず保護者の方々や多くの関係者の方々に見送られ自治医大駅を出発しました。

広島駅に到着すると、天候にも恵まれ研修1日目を迎えることが出来ました。

1日目は、まず、原爆ドームに向かいました。

テレビや写真などでしか見ることのなかった原爆ドームを目にしたときは、言葉に表すことができない衝撃がありました。この原爆ドームは、爆心地（当時：島病院、現在：島内科医院）から約160メートル離れた所にあります。爆心地にあった説明文には「原子爆弾は、この上空約600メートルでさく裂しました。爆心直下となったこの一帯は、約3,000度から4,000度の熱線と爆風や放射線を受け、ほとんどの人びとが瞬時にその生命を奪われました。」と記されていました。また、1945年11月に米軍によって撮影された写真があり、周囲はがれきの山となっており原爆の威力や悲惨さを改めて痛感させられました。

被爆体験講話会では、広島で被爆された波田さんの講話を聞きました。

波田さんは当時9歳で、学童疎開先（爆心地より20km）で被爆されたそうです。

ご両親は、爆心地から1.5km以内で被爆され幸い命はあったものの、その後の生活は劣悪な環境の中で暮らし、食べるものも思うように食べられず、口にできるものは、何でも食べていたそうです。事前研修会でも被爆者の方から講話をいただきましたが、さらに生徒の心にも響いたのではないかと思います。

その後、広島平和記念資料館を見学しました。資料館には、被爆者の遺品、被爆の惨状を示す写真や資料が展示されており、目をふさぎたくなるような写真も数多く展示されていました。たった一発の原爆により多くの尊い命が奪われ、そして多くの人の人生を狂わせてしまう核兵器の恐ろしさ、戦争の悲惨さを感じました。

2日目は、8月6日の平和記念式典（74回）に参列しました。

あいにくの曇り空で、参列席に入るところには雨が降り始め、雨の中の式典となっていました。

平和式典には、多くの国からの参列者の姿もありました。式典では、広島市長の

「平和宣言」、こども代表による「平和への誓い」がありました。

特に、小学生代表による平和への誓いでは、『国や文化や歴史、違いはたくさんあるけれど、大切なもの、大切な人を思う気持ちは同じです。みんなの「大切」を守りたい。「ありがとう」や「ごめんね」の言葉で認め合い許し合うこと、寄り添い、助け合うこと、相手を知り、違いを理解しようと努力すること。自分の周りを平和にすることは、私たち子どもにもできることです。』（抜粋）と誓いを述べていました。広島市長の平和宣言の中に「一人の人間の力は小さく弱くても、一人一人が平和を望むことで、戦争を起こそうとする力を食い止めることができると信じています。」という当時15歳だった女性の言葉を述べていました。

我々大人も子どもも一人一人が今できる事を考え、世界恒久平和を願っていくことが大切であると思いました。参加した生徒たちも一人一人が平和への思いや願いを新たにしたのではないかと思います。

2日目の夜は、原爆ドーム前の元安川の灯ろう流しに参加しました。

生徒一人一人、平和への思いを込めメッセージを書き込んだ灯ろうを流しました。そして、元安川に流れる様々な灯ろうの幻想的な美しさに見入っていました。

3日目は、早朝より平和記念公園の「原爆の子の像」を訪れました。

「原爆の子の像」は、被爆から10年後、新聞で禎子さんの死を知った男の子から「禎子さんを始め、原爆で死んだ子の霊を慰める石碑を創ろう」と提案があり、そのことがきっかけで、「原爆の子の像」が設置されたということです。下野市・壬生町の中学校の生徒たちが折った「千羽鶴」を奉納することができ、恒久平和の願いを捧げることができました。

この3日間の研修で派遣団一同多くのことを学ぶことができました。

我々は当たり前のように平和な生活を送っています。しかし、この平和な生活があるのは、終戦後多くの人たちが復興に向け、そして平和を願い努力し続けてきたからです。また、戦争により多くの尊い命が失われたことも事実です。このような惨劇が二度と起こらないよう、恒久平和を願うばかりです。

また、参加した生徒たちは、自分達の目で見、耳で聞いて、多くの事を肌で感じ取ってきたと思います。

これらのことを家族や学校、地域の方々に伝えるとともに、次の世代へ語り伝える伝承者となってくれることを願っています。

最後になりますが、このような機会を与えてくださった市当局の皆様、準備や送迎に協力してくださった保護者の皆様、学校関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

「原爆への思い」

南河内中学校2年 横島 陽平

私は、この3日間の体験を通して、様々なことを学ばせていただきました。

まずは、広島の復興力の高さです。広島駅を出ると、町には高層ビルが建ち並び、多くの人々が行き交っており、とても74年前に被爆した地とは思えないような光景でした。広島市民のみなさんが心を一つに町を復興させようとした努力が伝わってきました。

次に原爆の恐ろしさについてです。広島で実際に見た原爆ドームは、たった一発の原子爆弾がどれほど恐ろしいものかを物語っていました。

1日目に見学した平和記念資料館内では、その重苦しい雰囲気には圧倒されました。

原爆によって被害を受けた人々の写真や、その時の様子など、思わず目をそらしたくなるような風景が広がっていて、当時の様子が生々しく伝わってきました。また、被爆者講話でも、建物疎開や集団疎開せざるを得なくなった当時の状況を詳しく知ることができました。

2日目の平和記念式典は厳かな雰囲気の中行われ、私たちも身が引き締まる思いで式典に臨みました。

私たちはこの式典を通して、広島だけでなく、国としての平和に対する強い思いを感じました。「もう二度と同じ過ちを繰り返してはいけない」という思いが会場全体を一つにしたような気がしました。

その日の夜は、灯ろう流しを行いました。私は、戦争のない平和な世界になるようにという思いを込めて、「恒久平和」の文字を書き、流しました。

3日目は、原爆の子の像に千羽鶴を奉納しました。

私たち以外にも、とてもたくさんの千羽鶴が奉納されており、ここでも平和に対する思いの強さを感じました。また、袋町小学校見学では、国語の授業で習った「壁に残された伝言」に出てくる黒い文字を直接見ることができ、とても貴重な体験をすることができました。

私は、この3日間で広島市民や国民の平和に対する思い、戦争や原爆の恐ろしさなど、実際に行ってみないと分からないような体験をすることができました。

今後は、この体験を通して学んだことや感じたことを、家族や学校の友だち、そして地域の方々に広く伝えることが私の使命だと考えています。そして、後世にも広く伝え、二度と原爆を使うことのない、戦争の無い世の中になるようにしていきます。

最後に、今回の派遣を通して、普段の生活ではなかなか得られない経験をさせていただきました。この派遣に携わってくださったすべての方々に感謝したいです。ありがとうございました。

「広島派遣で学んだこと」

南河内中学校2年 榎戸 穂花

広島に原爆が投下され、74年がたった今年、私は中学生平和研修派遣団として、初めて広島の地を訪れました。

私は、広島の地に足を踏み入れたとき、74年前の8月6日、本当にここに原子爆弾が落とされ、悲惨な光景が広がっていたのかと、信じられませんでした。高層ビルが建ち並び、路面電車が走る広島の街は、驚くほど復興したのだと思いました。

私たちは広島に着いて、まず原爆ドームを見に行きました。原爆ドームは今にも崩れそうなほど、がれきが落ちていて、原爆がどれほどの威力をもっていたのかを感じました。

その後、私たちは被爆者の一人である波田さんの被爆体験講話を伺うことができました。波田さんは、9歳のときに疎開先で被爆されたそうです。波田さんのお父さんは、爆心地から約1.5キロの所で被爆し、亡くなるまで原爆症と戦い、77歳で亡くなったそうです。私はこの話を聞いたときに、原爆は生き残った人々の未来にも影響を与え、被爆者の方々は今もなお苦しみに続けていると分かり、とても心が痛くなりました。波田さんの話を聞き、私は今、友達と笑い合ったり、当たり前のように暮らしたりしているのはとてもありがたいことだと気付くことができました。

この貴重な経験を無駄なものにはせず、今ある生活が続くように、この出来事を風化させることなく、未来につないでいきたいと改めて感じました。

そして、8月6日、私たちは平和記念式典に参列しました。平和記念式典には、地元の方だけでなく、私たちと同じ中学生や多くの外国の方が参列していました。外国の方の平和に対する関心の高さにとっても驚きました。

式典に参列していた全ての方々が強く平和を願い、一つになっていました。

私は、この平和記念式典のように世界中の人々が平和を願い、一つになって欲しいと強く感じました。

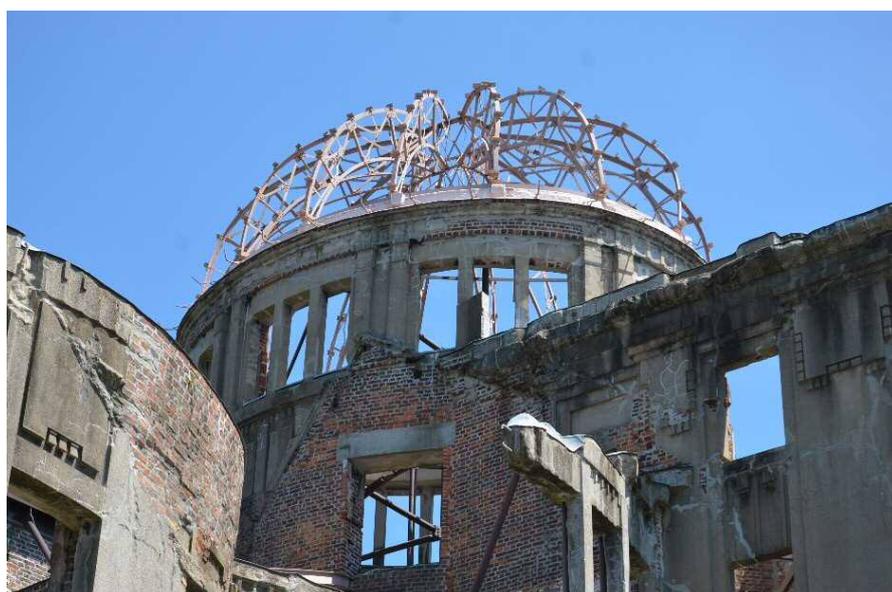
その日の夜、私たちは灯ろう流しをしました。灯ろう流しでは、元安川にたくさん灯ろうが流れ、その一つ一つの灯ろうに平和への願いが込められていました。私も、恒久平和を願いました。

「平和」はたった二文字ですが、簡単に成し遂げられるものではありません。平和を実現させるためには、平和記念式典の子ども代表の平和への誓いにもあった「ありがとう」や「ごめんね」の言葉で、認め合い、許し合うこと、寄り添い、助け合うこと。相手を知り、違いを理解しようと努力することが大切です。このことは、子どもの私たちにもできることです。小さい力もいつか、今以上の平和につながる大きな力になります。

中学生平和研修派遣団として、貴重な体験をさせていただいた私たちには、命の尊さ、平和の尊さを未来に語り継いでいくという使命があります。そして、私たちの小さな力を大きな力にかえ、世界中の人々が笑顔で明るく暮らせる世界をつくり

たいです。

最後に、貴重な体験をさせてくださった下野市の職員の皆様、引率してくださった先生方、本当にありがとうございました。



「広島への派遣で感じたこと」

南河内第二中学校2年 大久保 湊太郎

私は、今回この事業に参加して、今までに無い多くのことを学び、感じる事ができました。私はこれまで、テレビや新聞を通して見聞きしてきましたが、実際に広島を訪れて見ると、はっきりとした感情が湧き上がってきました。

最も感動したのは、復興し発展した広島の街を見た時です。74年前に焼け野原となったとは思えませんでした。沿道に建ち並ぶたくさんの高層ビル、多くの車が行き交う広い道路、楽しげに街を歩く人々の姿。大都市に成長した広島を見て、とても感動しました。

74年前に落ちた原爆は、多くのものを奪いました。ここ広島に原爆が落ちる前は、活気にあふれた賑やかな街だったはずですが。

しかし、原爆の投下でその全てが奪われてしまいました。多くの人の命が一瞬で奪われました。そして74年経過した今も原爆による後遺症が一人、二人と人々の命を奪い続けています。この現状を知って私は、とても驚き、心が痛みました。

また、資料館の見学にも参加しました。当時のことについてより詳しく知ることができ深く関心を持ちました。

広島では、多くの行事への参加もできました。

被爆者からの話では、当時の悲惨な状況を生で聴くことができました。式典では、外国人も多数いる中で、平和を強く願いながら式典に参加しました。川への灯ろう流しは、思いを込めて灯ろうを浮かべ、辺りはなんともいえない幻想的な光景でした。千羽鶴奉納では、全員の思いが集結した千羽鶴を奉納しました。これらは、大変貴重な経験となりました。

広島市長や安倍総理の話を持聴し、二度と戦争を繰り返してはならないということ強く感じました。また、式典で特に驚いたことは、参列した人の多さです。会場に収まらない程の人であふれかえっていました。広島を知って、平和を願っている人は世界中にいることを実感しました。

世の中が平和になることを願う気持ちは、絶対に忘れてはいけないと改めて思いました。

今回、実際に広島に行き自分で歩き、見聞きすることで、多くの発見と深い学びを得ることができました。それらは普段の生活では得ることのできない特別なものとなりました。

今回得たものを、友人・家族・地域の方々へ伝え、広島のことをもっと知ってもらいたいと思います。

「広島での体験を通して」

南河内第二中学校2年 二宮 和奏

私はこの派遣事業で、さまざまなことを学ぶことができました。

まず私たちは、原爆ドームに行きました。今まで写真で見えていたものとは違い迫りがありました。ドームの中には瓦礫があり、あの原子爆弾一発でここまで壊れてしまい、多くの人々が亡くなっていったことを考えると、胸が苦しくなりました。

私が今回、一番印象に残ったのは、平和記念資料館見学です。中には、原爆で亡くなった人達の遺品や絵がありました。

遺品の中には、服や三輪車がありました。そしてその持ち主のことを知ることができました。私はそれまで「多くの人」と考えていた被爆者の、一人一人の家族や思いに触れた気持ちになりました。また当時描かれた絵も展示してありました。そこに描かれていた人は皮膚が垂れ下がっていたり、真っ赤に染まっていたりしました。

私は、このような情景が目の前に広がっていたと思うと、原爆の恐ろしさを改めて実感しました。

私は、広島へ行ってさらに驚いたことがあります。それは、人の多さです。原爆ドームへ行ったときや、平和記念式典に参列したときに、私たちと同じ中学生や高齢者、外国の方など多くの人々が平和について考えようとしていたのです。私は、この広島で起こった事が世界的に注目されていることを知り、全員が平和な世の中を望んでいると思いました。

私は、この派遣学習で命の尊さ、被爆者の思い、そして平和の大切さを知りました。また、多くの人々が平和について学び、考えようとしていることを感じました。私は、広島で見てきたこと、学んだことを決して忘れないようにしたいと思います。

最後に、私の体験をこれからの生活に生かし、多くの人に伝えていきたいと思えます。



「平和研修派遣事業で学んだこと」

石橋中学校2年 中田 征吾

今回この平和研修派遣事業に、各学校2名ずつ選ばれ、広島県に行き、私は多くのことを学ぶことができました。

今まで自分で調べたり、事前研修などで見聞きしたり、人を介してでしか学べなかったことを直に自分の目で確認することができ、とても貴重な体験をすることができました。

1日目に見学をした原爆ドームは、写真で見たイメージよりも小さく感じられました。窓があるはずの場所は空洞となり、壁はいたる所がボロボロになっており、原子爆弾のすさまじい破壊力と恐ろしさをまざまざと感じました。

次に見学した平和記念資料館では、被爆した人々を写した写真や当時の様子が描かれた絵を見学しました。当時その場にあったガラスピンが、とけて固まった物があり、爆心地のとても高温な温度を垣間見ることができました。展示されている一つ一つのものに、戦争の悲惨さを感じ、見学していて目をそむけたくくなりました。また同時に、二度と同じことがあってはならないと改めて強く思いました。

2日目には、平和記念式典に出席し原爆で亡くなった方々の遺族や、生き延びた人々の他、自分達のような他県の中学生や世界各国の代表の方々など多くの方が式典に参列していました。

平和を強く願うとともに、被爆者の方々や戦争で亡くなった多くの人達に黙祷をささげました。

宮島での厳島神社見学では、国宝であると同時に世界遺産でもある厳島神社を見ることができとても貴重な体験をすることができました。また、宮島までの船の中から見た広島市は、被爆地とは思えないほどに発展していて、広島の人々の努力が伺えました。

そして夜に行った灯ろう流しで、亡くなった人達を思い自作した灯ろうを流しました。

3日目は、原爆の子の像に学校の全生徒が一丸となって作り上げた千羽鶴を奉納し、奉納場所の平和を願う鶴の多さにとても驚きました。

袋町小学校平和資料館見学では、教科書で見た壁に残された伝言を直に見ることができ、家族や知人を探す人達の願いが伝わってきそうでした。

今回の平和研修派遣事業で、数多くのことを体験し、見て、考え、学ぶことができました。その中で改めて平和の尊さ、命の大切さ、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさを再確認することができました。

今回のこの貴重な体験で学んだことや感じたことを、学校などで伝達していき唯一の被爆国である日本の中学生として、自分達のできることを少しずつでもしていく、それが派遣団に参加した自分の役割として、果たしていきたいことです。

「今ある平和を守り続けるには」

石橋中学校2年 野口 実夢

戦争のない時代に生まれてきた私は、戦争の悲惨さや恐ろしさ、命の尊さ、平和の大切さを知らない。しかし、私たちは知らなくてはいけないのだと思いました。

時が経つにつれて、戦争の時代を経験した人が少なくなっています。そこで終わりにしてはいけないと思いました。だから、私たちは戦争がどれほど怖いもので、今がどれほど平和であるかを知り、たくさんの人に伝え、二度と戦争が起こらない平和な未来を守り続けたいと思い、私はこの、平和研修派遣事業に参加させてもらいました。

8月5日から7日にかけて、下野市と壬生町の代表の生徒、12名が広島へと行きました。新幹線で広島へとむかい、広島駅に着き、駅を出た瞬間に、私の目には、まぶしい太陽と真っ青な空に白い雲があり、その下には数えきれない程の人にたくさんの高層ビル、道路の真ん中を走る路面電車がいました。74年前に原子爆弾が落ちたとは思えない景色が広がっていました。黒こげの何も無い広島をよくもここまで復興できたなど、広島の地を歩き、感じました。

そして、原爆ドームに着きました。はじめてこの目で見て、思っていたよりも小さいなと思いました。

74年間もたち続けている原爆ドームは今にもくずれ落ちそうでした。原爆ドームと名をつけられる前はとても丈夫な建物でしたが、一つの原子爆弾により、ほとんどが破壊されてしまいました。破壊されたのは建物だけでなく、多くの人々の心もこわされてしまったんだとこの目で見て、肌で感じられました。この原爆ドームは戦争の悲惨さ、恐ろしさを教えてくれる、これからも残し続けていかなければならないと思います。

資料館では、子供が見ても分かりやすいように展示と一緒に写真があり、あの日にとどのようなことがおこったのかをわかりやすく知ることができました。一つ一つの展示から、たくさんの想いを感じ、二度と戦争はおきてほしくないと思いました。

2日目は式典に参加し、灯ろう流しを行いました。いつもはテレビで式典を見ていましたが、実際に式典に参加してみると、テレビからでは分からないことを感じました。式典に参加している人がみな、平和を祈っているのを自分も参加し、実際に目にし、平和の大切さを知りました。

夜の灯ろう流しではたくさんの人が平和への祈りをこめ、灯ろうを流していました。自分も灯ろうを流し、流れていく灯ろうはとてもきれいでした。これからはずっと、灯ろう流しを続けていってほしいです。

3日目には原爆の子の像へ行き、袋町小学校資料館へと行きました。

原爆の子の像には数えきれないほどの千羽鶴がありました。私たちもみんなで一斉懸命折った千羽鶴を奉納しました。

袋町小学校資料館では、教科書で目にした物を実際に見ることができました。黒板に書かれた伝言は、その人が生きていた証なんだと思いました。たくさんの伝言が袋町小学校に書かれていることが分かりました。

私がこの3日間の中でも、一番印象に残ったのは被爆者講話でした。

実際に被爆者の方からお話を聞くと、胸が苦しくなり、戦争の悲惨さや原子爆弾の恐ろしさを感じ、たくさんの方が平和を願っていることに気づかされました。

年々と被爆者の方が少なくなっています。その中でもお話を聞いた私たちはたくさんの方に伝えていかなければならないと思いました。

私たちがあたり前のように過ごしている毎日は平和であることにみんなは気づいていません。おいしいご飯を口にできることや、学校に通えること。私たちにとってはあたり前かもしれないけどその小さな一つ一つが平和だと考えさせられました。

戦争の悲惨さ、恐ろしさ、命の尊さ、平和の大切さを理解できる私たちが平和な未来を守り続けなければいけないと思いました。今回学び、考えたことをたくさんの方に伝えていけたらと思います。



「広島派遣に参加して」

国分寺中学校2年 森下 隆貴

広島に原爆が投下され、今年で74年という時が経ちました。74年前の8月6日、広島は町は一瞬にして破壊され、その被害にあった人々の死体で溢れかえってしまいました。

私は、8月5日から7日まで市の派遣団の一員として広島を訪れ、原爆の破壊力、恐ろしさを学んできました。現在の広島は、74年前とは全く違っており、たくさんビルが立ち並び、木々や草花がたくさんあり、とても原爆が落とされた町とは思えないほどきれいな町でした。しかし、今もまだ被爆された方々の心には深い傷が残ったままなのです。

1日目、被爆した当時の広島のことについての講話を聞きました。

講師の波田さんは、9歳で被爆し、あの日の出来事を私たちに分かりやすく教えてくださいました。波田さんのお話を聞いて、あの日の広島はどんな状況だったのかを知りました。広島は、原子爆弾たった一つで焼け野原になり、川の中や道などが死体で溢れかえていたそうです。その中には、私たちと同じ年齢の人たちもおり、一瞬にして人生を奪われてしまったのです。その人たちにも家族がおり、友達もいて、私たちと同じように生活していたのです。

このように、一瞬にして人生を奪ってしまう原子爆弾。戦争は絶対に起こしてはならないと改めて思いました。

これから先、戦争が二度と起こることなく、みんなが楽しく、安心して暮らせる世の中になってほしいと思いました。

2日目、平和祈念式典に参加しました。

台風の影響もあり、雨の中での式典になってしまいました。しかし、この雨にもかかわらず、大勢の人たちが参加していました。式典での平和への祈りを聞いて、同じことを繰り返してはいけない、あの日のことを忘れてはいけないと思いました。そして、明るい未来を築くために核兵器の恐ろしさを伝え、それをなくすることが世界平和への第一歩だと思いました。

3日目、私たちはみんなで作った折り鶴を奉納しました。

私は平和への祈りを込めて奉納してきました。

広島は町では、毎朝8時15分に平和の時計塔のチャイムが響き渡っています。今、このように生活できていることに感謝し、二度と戦争が起こらない平和な世の中が永遠に続くように、自分にできることをやっていきたいです。

実際に被爆された方々の高齢化が進み、あと10年もすると、もうお話を聞くこともできなくなってしまいます。今回この研修で経験したことを忘れずに、原爆で亡くなられた方々の思いを背負い、これから学校や地域の方々に伝えていきたいと思えます。

本当に貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

「広島から繋ぐもの」

国分寺中学校2年 上野 有里佳

「なんてたくさんの外国の方がいるのだろう」

私は広島に行ってもずこのことに驚きました。日本に落とされた原爆について、日本だけでなく、世界の人々が関心を持ち、平和について考えている、ということをも身をもって実感しました。

原爆が投下された74年前の8月6日。母や子を目の前で亡くしながら自分の命を何とかとりとめた人、頭から血を流し、皮膚がぼろぼろにはがれ落ちた人、投げ捨てられた遺体で埋まる川。生き残っても、後遺症により苦しんだ人が何万人といったこと。

生々しい原爆の被害に驚きを隠せませんでした。

これだけでなく、さらにたくさんの被爆時の様子を被爆体験講話や資料館見学などから学びました。これらには「この体験を風化させないで」「原爆の教訓を忘れずに二度と戦争のない平和な世界を作って」というメッセージが込められていると感じました。

広島に外国の方が多かったことから、世界的に平和への関心は高まっていることがうかがえます。しかし、当事者の日本ではどうでしょうか。

例えば、新聞の報道です。平和記念式典の記事は、翌日、広島市の新聞では1面で、ある新聞では2面で掲載されていました。原爆の被害にあった地域や人々、その遺族、そしてそうでない地域の人々とは、原爆の受け止め方に差があることを感じさせます。

当たり前前の日常が平和だと気付くことが少ない今、日本に原爆が落とされ、尊いたくさんの命が奪われたことが、このままだと忘れられてしまうかもしれません。絶対にそうしないため、この広島での体験を広めていきたいです。

また、1日目の講話で、二度と核兵器による被害を出さないための核兵器禁止条約があることを知りました。まだ発効されておらず、日本は調印していないため、一刻も早い調印が叫ばれています。二度と核兵器によって命を奪われないために、調印が必要だと思いますが、絶対にそうと言える自信がないので、もっと勉強が必要です。

私は原爆投下直後と今の広島を見比べて、広島市民の前を向いて平和のために進む力に驚きました。焼け野原から、今では立派な都市に変わっています。

平和のために小さな子供から百歳をこえるお年寄りまでが、声を上げている姿が、深く印象に残りました。

今回学んだ、原爆一つで、どれだけ多くのものを失うかや、平和であることへのありがたさを広めていきたいと思えます。また、自分なりの意見をもつために、もっと核兵器や国際情勢などを学んでいきたいです。

広島派遣は、私にとって衝撃的なことも多かったですが、命や原爆、平和を考える大切なきっかけになりました。

このことを忘れず、平和を広め、訴える一人になっていきます。